

大東文化大学 博士学位論文審査報告書

氏 名 高橋 秀城

学 位 博士（日本文学）

学 位 記 番 号 乙第36号

学位授与年月日 平成30年3月22日

審 査 研 究 科 文学研究科

論 文 題 目 中世密教文学の研究

論文審査委員	(主査) 大東文化大学教授	檜垣 孝
	(副査) 大東文化大学教授	播本 眞一
	(副査) 大東文化大学准教授	浜口 俊裕
	(副査) 大東文化大学名誉教授	関口 忠男
	(副査) 大正大学教授	苫米地 誠一

高橋秀城博士学位論文審査報告書

2018年3月2日

博士論文提出者：高橋秀城

論文題目：中世密教文学の研究

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

1. 論文の要旨およびその特色

高橋氏の博士学位請求論文（以下、本論文と略称）「中世密教文学の研究」の内容は、以下に示す目次の通りである。

緒言

第一章 西行の和歌観と真言密教文化圏

一 西行の和歌観と覚鑿の一密成仏思想

二 西行周辺の僧侶一如寂『高野山往生伝』をめぐって一

三 僧房で語られる怪異と西行の娘

まとめ

第二章 頼瑠の文学的研究

第一節 頼瑠『真俗雑記問答鈔』諸本について

『真俗雑記問答鈔』諸本概観

第二節 頼瑠の文学

一 歌書目録一上覚『和歌色葉』との関連から一

二 和歌一〈一心〉の境地一

三 歌学一「声」の系譜一

四 言談一説話との重なり一

五 夢想一夢が果たした役割一

まとめ

第三章 根来寺と文学一聖教の広がり一

第一節 中央寺院での展開

一 覚鑿『孝養集』の享受 一智積院新文庫蔵本を中心に一

二 頼豪『東草集』の「小亭記」をめぐって

三 智積院所蔵の文学関連史料について

第二節 地方寺院での展開

一 『真俗雑記問答鈔』と鹿児島坊津一乗院

二 坊津一乗院における〈中央〉と〈地方〉

付・東京大学史料編纂所蔵『一乗院諸記』翻刻

まとめ

第四章 真言僧侶の修学と文学

第一節 『連々令稽古双紙以下之事』

一 幼童の稽古をめぐって

付・東京大学史料編纂所蔵『連々令稽古双紙以下之事』翻刻と影印

二 『連々令稽古双紙以下之事』筆録者考

第二節 講式

一 講式の書体と場

二 智積院新文庫所蔵の講式

三 二尊信仰の一齣

付・上野学園大学日本音楽史研究所蔵『二尊講略式』翻刻

まとめ

第五章 真言密教文芸

第一節 口決と文学

一 「雑談」から「口決」へ

付・薬師寺蔵『醍醐寺真俗雑談記』翻刻

二 「物語」と「口決」の接点

付・国立国会図書館蔵『宥快法印御物語之事』翻刻

第二節 和歌と密教

一 身と心の歌

二 随心院蔵『〔中臣祐殖家集断簡〕』

付・『秘奥集』『阿弥陀決定往生秘印』紙背翻刻

第三節 お伽草子・説話と唱導

一 お伽草子『幻夢物語』の展開一

付・随心院蔵『源夢物語』翻刻

二 『可笑記』と『宝物集』一唱導との関連から一

付・智積院新文庫蔵『〔根來說草集〕』翻刻

第四節 紀行文

一 『成田紀行』をめぐって

付・成田山仏教図書館蔵『成田紀行』翻刻

二 参詣と和歌

三 室町末期醍醐寺僧の巡礼記 一 殿助『高野参詣路次中日記』をめぐって一

まとめ

第六章 密教と文学

一 僧と財とのあわい一無住を手がかりとして一

二 法語と文学一『沙石集』の法語的側面一

三 密教文学一信仰曼荼羅一

まとめ

結語

初出一覧

日本文学における仏教の影響は、極めて広く深い。とりわけ古典文学においては、仏教と切り離すことができないほど、その作品世界と深く結び付いている。わが国の密教は、平安時代に伝教大師最澄（767～822）・弘法大師空海（774～835）によって中国からもたらされた。天台宗の密教を台密、真言宗の密教を東密と言うが、特に真言宗の密教は、高野山金剛峯寺や京都の東寺・仁和寺・醍醐寺などを中心に展開し、また、寺院建築や仏像彫刻・絵巻・音楽（声明）などの芸術活動と密接に関わり、日本の文化に甚大な影響を及ぼしている。中世文学作品を概観しても、密教はその思想的背景の一つとして見過ごすことのできない存在であり、その様相を明らかにすることは重要な意義を持つものと思われる。

本論文は、日本文学と仏教思想との影響関係について、とりわけ、平安時代末期から鎌倉・室町時代にかけて成立した、いわゆる中世文学作品と密教思想との交渉に焦点を当てて考察を進めたものである。高橋氏は、特に密教に関わる中世文学作品を「中世密教文学」と呼称している。研究を進める方法として、藤村作氏編『日本文学大辞典』（新潮社、1950年）の「仏教文学」の項にみえる三つの定義、

- 一 文学的価値如何を問題とせず、宗教的価値を目的として制作されたものであるが、それに文学的価値が付随的に伴われてゐるもの。
- 二 宗教的現象を素材として、文学的要素から創作されたもの、即ち制作動機が芸術的で

あるもの、而してこの種の作品のうちには、宗教的要素が豊富なるがため、宗教的価値要求から創作されたもののやうに見受けられるものがある。

三 宗教的価値と文学的価値とが同一の強さで主張され要求されてゐるもの。

を土台にし、定義の第一に関わるものとして新義真言宗の大成者と称される頼瑜（1226～1304）を始めとする真言僧侶の著作を、定義の第二に関わるものとして西行（1118～1190）の和歌と言動を、定義の第三に関わるものとして鎌倉時代後期の僧侶無住（1226～1312）の著作をそれぞれとりあげ、仏教に軸足を置く頼瑜たち、文学に軸足を置く西行、その両者の間に位置する無住の著作の三者を多角的に考察し、中世密教文学の成立の実体を立体的に捉えようとするところに、本論文の特色がある。

以下、本論文の要旨を、章ごとに追ってゆきたい。

緒言では、高橋氏が用いた如上のような研究方法が述べられている。また、文学と宗教を繋ぐものとして、特に僧侶の著作（例えば『真俗雑記問答鈔』や『連々令稽古双紙以下之事』）に記載された、僧侶の修養に必要だとされる書目録の中に、『万葉集』以下の文学書類や『論語』に代表される経書類などがあって、僧侶の修行に文学享受が欠かせない要素となっていることが解ると指摘している。仏教と文学の相互交流の跡を探るという方法をとろうとしているところに、高橋氏の立論の特徴があるといえよう。

第一章では、西行をとりあげている。まず川田順氏の、「西行は覚鑿寂後に入山したのであるが、遺徳を慕ひ、密教浄土を欣求するに至つたであらう事は、十分に想像し得る」（『西行』〈創元社、1939年〉）という論を引用し、両者の直接的な交渉は明らかでないながらも、覚鑿の兄弟弟子であり、西行の腹心の友であった西住（？～1182以前）や、西行と同時代に高野山に居て活動し、西行との交流も考えられる覚鑿系統の僧侶たち（兼海〈1107～1155〉や証印〈1105～1187〉など）を介して、西行が覚鑿の思想を受容し得る状況にあったことを論じている。興教大師覚鑿（1095～1143）は真言密教を浄土教的に解釈する道を開き、新義真言宗の祖とされる人物である。西行と覚鑿の関係を考える上で重要な一例として、覚鑿が思い立った高野山における談義の道場・蓮華乗院の建立に際して、西行がその建立の奉行を勤めたこと（『高野春秋編年輯録』に記録がある）をあげている。さらに、覚鑿著の『五輪九字明秘密釈』（1141～1143頃）に一密成仏思想が説かれている事に注目して、西行の和歌に一密成仏思想（特に口密成仏思想）の受容が認められることを論じている。また、西行の和歌観の深化について、晩年の西行が京都梅尾高山寺の明恵（1173～1232）に語ったとされる、「一首読み出でては一鉢の仏像を造る思ひをなし、一句を思ひ続けては秘密の真言を唱ふるに同じ」（『梅尾明恵上人伝記』）をとりあげ、ここに和歌陀羅尼観ともいべき西行晩年における究極の和歌観が表出されているのであるとし、言語がそのまま真言であり、口密による和歌活動の実践であり、悟りへの因となるという積極的な意味もあつたのであると結論している。この他、頼瑜著の『真俗雑記問答鈔』第十五の「招魂法事」に語られた怪異譚に登場する「則清入道女」が西行の娘である可能性が高いという新知見を提示している。

なお、この章については、新しい説（苫米地誠一氏「西行と大伝法院・仁和寺」[『浄土教と仏教』〈廣川堯敏教授古稀記念論集刊行会編、山喜房仏書林、2014年10月〉]の、西行が覚鑿を師として出家した可能性もあると指摘する説など）も出されているので、出版までには加筆が必要になるだろうという旨の指摘が、面接時になされたことを付しておきたい。

第二章では、頼瑠著の『真俗雑記問答鈔』（1282頃までに執筆）をとりあげている。この著作は、仏教教理に関することから世俗的なことまで、僧房における秘説を問答形式によって記録したもので、1,300項目以上もの事柄を全27巻（30巻とも）に収めた百科辞典ともいえるべきものである。まず、その諸本の分類・流布過程などの系統立てを試み、次に、『真俗雑記問答鈔』第五にみられる歌書類を主とした目録について考察を加えている。そこには、『古今集』を始めとする勅撰集や私撰集・打聞・髓脳・口伝・物語など百を越す書名が列挙されており、それぞれに撰者や作者・成立年次等の注記が付されている。この目録については、今日まで全く論じられていない。高橋氏は、頼瑠がそれらを書き留めたのは僧房における修学の実態を示したものだとし、さらに平安時代以降の歌論書・書籍目録類7種（『和歌色葉』・『本朝書籍目録』など）との比較をし、この目録が、上覚（1147～1226）著の『和歌色葉』（1198頃）の影響を受けていると結論している。この論は、頼瑠という人物が新義真言宗の大成者として知られるだけでなく、文学的側面にも深く関わっていた僧侶であることを指摘することになっており、「真言文化圏」における僧侶の文学活動の様相を解明したものともなっている。

第三章第一節では、まず、覚鑿撰述の『孝養集』をとりあげている。『孝養集』は、覚鑿が母親の極楽往生を願って執筆したものであるが、やがて本来の意図を離れ、出家者に対する入門書として、また在家者に対する唱導書としても有効な書であると認識され享受書写されていったと論じている。次に、頼豪撰述の『束草集』巻第六に収められている「小亭記」をとりあげている。『束草集』は、和歌山根来寺の頼豪（1280～1360以後）が自身作の願文・諷誦文・表白などを集成した模範文例集である。「小亭記」には、従来、鴨長明（1155～1216）の『方丈記』の影響があると論じられているが、高橋氏は、慶滋保胤（？～1002）の『池亭記』を加味して文章比較を行い、『池亭記』の記事に依拠しているとみられるものの方が多いとして、「『池亭記』の枠組みそのままに、『方丈記』も参照しつつ記したと考えるほうが自然である」と結論している。また、第二節では、『真俗雑記問答鈔』の伝本と所蔵の実態を調査し、京都智積院新文庫所蔵本が鹿児島般若寺において書写されたものであることを発見し、「僧侶がいかにして作品を生成し、それがどのように伝来し、どのように享受されたのか、それらを総合的にみることによって、密教文学の生み出される場、伝来の実態、享受の有り様、移動の諸相」が浮かび上がってくるはずで、それらを調査してゆくことで「真言文化圏」における宗教・文学両面にわたる営みの実体がみえてくるのであると論じ、さらに、著作が生み出された和歌山の根来寺、地方に伝播して享受書写された鹿児島の般若寺、その本が伝来して所蔵された京都の智積院という、中央と地方のネットワークが成立していたことを確認している。

第四章第一節では、真言僧侶の修学の様相が書き記された『連々令稽古双紙以下之事』をとりあげ、東京大学編纂所蔵本を解題を付して翻刻している（これは、「東京大学編纂所蔵『連々令稽古双紙以下之事』翻刻・解題」と題して、二松学舎大学21世紀COEプログラム『声明資料集』〈2006年3月〉に収録したものの再録である）。この書は、僧侶の必須の教養として、学問稽古すべき80の内外の諸典籍を列挙したものである。特に注目すべきは幼童の十五歳の春までに修むべきものとして34の内外の書物が列挙されている点であるとする。さらに、身延山久遠寺の僧日意（1444～1519）の『蔵書目録』との比較も行い、その「俗書分」には『論語』など俗書20点がみえるが、その約半数の典籍が本書と共通しているとして、仏教典籍を学ぶ以前の基礎教養となっているのが僧侶の修学における外典の役割であることを論証している。また、この書の

筆跡と、東寺宝菩提院の俊雄（1455～1516）の著作『亮恵伝授記』（1511～1514までの記）の筆跡を、写真を掲載して比較検討し、「俊」の字の人偏（イ）その他に、共通した特有な筆跡が認められるとして、この書の筆録者は俊雄であろうという新知見を提示している。

第二節では、仏教行事としての講会の法式や表白などを記したものである講式をとりあげ、講式の書体について考察し、あわせて講式の法会が実際にどのような次第（順序）で進められ、講式（式文）がどのような場で読み上げられていたのかの考察を試みている。具体的には、南北朝時代の浄土宗西山派の学僧慧仁（1309～1388）の、阿弥陀仏と釈迦仏の恩徳による極楽往生を讚美する講式文である『二尊講略式』をとりあげ、その式文や奥書の検討から浄土教的色彩が濃厚であるという特徴を明らかにし、あわせて『二尊講略式』が講讀された滋賀の宝寿寺と京都の西山三鈷寺が共に慧仁の活動した寺院であることについても論究している。

第五章第一節では、醍醐寺僧定任（1262～1309）著の薬師寺所蔵『醍醐寺真俗雑談記』と、高野山の全秀（生没年未詳）著の国立国会図書館所蔵『宥快法印御物語之事』（1403年執筆）をとりあげている。『醍醐寺真俗雑談記』は、定任が甥の貞祐（生没年未詳）に語り聞かせた様々な事柄22話を記したもので、『宥快法印御物語之事』は、全秀が師の宥快法印（1354～1416）にまつわる62話の物語を記したものである。特に、『醍醐寺真俗雑談記』は、定任が貞祐に法灯を伝授する際に、醍醐寺の付法や堂塔の創建、事相や座主に関する記事などを、醍醐寺に関わる様々な物語として語り聞かせた体の雑談集である点に注目し、伝授の際に定任が貞祐に語った「雑談」は、やがて「秘事口決」へと変容を遂げ、師から弟子への法門相承の際の口伝として醍醐寺内に伝えられていったのであると論じ、この資料の伝本は他に見当たらないことから、広く人々に知れ渡ったものとはいえないが、雑談から説話集へと発展する方向ではなく、醍醐寺内でのみ連々と語り継がれる口決として秘蔵されてきたことに特徴があるのではと結論している。『宥快法印御物語之事』についても、同じように寺院内における法門口伝の様相を知ることができる貴重な書であると論じている。また、二書ともに、伝来や書写者など書誌的事項を調査し、全文を翻刻している。

第二節では、山科随心院所蔵の書籍2点の紙背に記載されている中臣祐殖の詠歌の断簡をとりあげ、『[中臣祐殖家集断簡]』（仮題）としてこれを翻刻し、それによって祐殖の歌集復原を試み、全96首のうち新出歌10首を含む計15首を見出し復原することに成功している。第三節では、お伽草子『幻夢物語』の一伝本である山科随心院所蔵の『源夢物語』をとりあげ、これまで巻首部分が欠落しているとされていたのを、同じ随心院が所蔵している「聖教断簡一括」の中にその巻首部分があることを発見し、書誌的事項を含めて紹介し翻刻を行っている。また、京都智積院新文庫所蔵の『[根來說草集]』をとりあげ（説草とは、法会などに際して読み上げ、また語るために整理した説教の草稿の類をいう）、その書誌および内容を検討した結果、前半は仮名草子『可笑記』から、後半は仏教説話集『宝物集』からの抄出であることを明らかにしている。第四節では、筑波山近くに住む寿閑子なる人物の著『成田紀行』と、巖助（1494～？）の著『高野参詣路次中日記』をとりあげ、『成田紀行』にあつては、旅の途中に寺社・名所旧跡に立ち寄り参拝し、縁起を書き留め、和歌を詠んだりしていることに注目し、僧侶の書く寺社巡礼記は、信仰に基づく巡礼と参詣を主とし、また和歌を奉納することによるさらなる仏縁を願う行為であったと論じている。『高野参詣路次中日記』は、1522年に醍醐寺から高野山に参詣した旅の記であるが、参詣の目的は、前年に火災に見舞われた高野山の現状を確かめ、一刻も

早い高野山の再興を祈願するためのものであったと論じ、また、旅の途次、山科本願寺や興正寺の僧が援助をしてくれる様子が詳しく記されているとし、醍醐寺と浄土宗寺院との交流が存在していたのだろうと論じている点に新見がうかがえる。

高橋氏は、以上を通して、僧侶の残した著述書を始め、寺院に伝わる和歌集や、お伽草子、説草の類、また、僧侶の寺社巡礼記やその中での参詣歌など、考察すべき対象は多いが、一つ一つを丁寧に読み解くことで、「真言文化圏」の中で生み出された密教文学作品の種々相が具体的にみえてくるのであると結論している。

第六章では、無住の『沙石集』と『聖財集』をとりあげている。『沙石集』は、人々を信仰の世界に導こうとする法語的性格を持つ著作であり、『聖財集』は、悟りに至るための神聖な徳目（信・戒・慚・愧・聞・施・慧など）を財産にたとえ、仏道を志す人々のための心得を説いた入門書である。高橋氏は、先ず、僧侶における「財」の問題を論じ、『沙石集』巻第六の「(一七) 有所得説法事」を例に、財宝や名誉を求めて説法する僧侶の罪は重いのであると説かれていることを指摘し、僧侶が仏道修行を行うためには、その基となる僧衣や食べ物、住居などの資縁が必要なのではあるが、才智ある者が仏法興隆のために集める財は「聖財」となり、財宝のみに執着する者にとっては「世財」となると述べ、物質としての「財」は、取り扱う者の智慧の有無によって、妙薬ともなり甘毒ともなるのであると結論している。次に、『沙石集』にうかがえる法語的性格について論を進め、『沙石集』の冒頭文を引きながら、それを現代語訳する形で、仏が衆生のためにあえて粗野な言葉を用いて導くように、無住も、衆生を仏の世界に引き入れるため、俗世間の卑近な事柄を喩えとしながら仏教の真理を説き明かそうとしているのであるとし、そこに仮名法語としての性格をみている。

最後に、「密教文学—信仰曼荼羅—」という項を立て、仏教（密教）と文学は、究極では融け合っているのではないかという見通しが述べられている。寺院資料として蔵されているのは内典だけではなく、『連々令稽古双紙以下之事』などに記載されているような外典（文学書など）があること、幼童期に学ぶ外典は、出家後の修学の豊かな土壌となり、寺院内での修行の結実として生み出される言葉（法語）は、仏教へ誘う種（仮名法語）として再び世間に蒔かれるのであると論を進め、内典によるとか外典によるというような区別は存在しなくなるであろうと述べ、結局、人間の持つ普遍的な信仰のもとに、仏教と文学は融和し統合されてゆく、その先に信仰曼荼羅としての密教文学が存するのであると論究している。

2. 論文審査の内容および評価

以下、本論文の審査の内容および評価について報告する。

本論文は400字詰めに換算して約1,820枚となる大部なものである。このうち資料翻刻と解説が約480枚あるが、それを差し引いても1,300枚を越え、博士学位論文を受理する前提条件（論文博士の場合400字詰めに換算して800枚以上）を満たしている。また、研究業績として査読論文が2編以上あることが条件となっているが、最初に紹介したように査読論文は25編を有している。

さて、本学大学院文学研究科では評価すべき項目は、次の六項目となっている。

(1) 研究テーマの適切性（明確な問題意識に基づき、研究の意義や必要性が的確に説明されている。）

高橋氏は、緒言において、「学界における文学と密教思想との関連についての研究は、ごく最

近になって見直しの機運が出てきたものの、ほとんど未開拓の状況である」ことを指摘し、「密教と文学との結びつきを解明し、密教文学研究に道筋を付けることを研究の目標と定めた」と記している。明確な問題意識に基づいて、研究の意義や必要性を的確に説明していると判断できる。

(2) 研究方法の妥当性 (研究の目的に照らして、適切な研究方法が用いられている。適切な資料が的確に使用されている。)

高橋氏は、密教文学をより立体的に捉えるため、高野山や京都・奈良の諸大寺における芸能・唱導・法会などの文化活動がなされる場を、「真言文化圏」という枠組みで捉えることを提唱している。密教文学と「真言文化圏」という場を組み合わせることにより、それぞれの寺院間での人的・思想的交流が、文学生成に如何に反映しているのかを考えてゆこうとする。そのために、文学者の側からは西行をとりあげ、西行の和歌にみられる仏教思想の受容を解明し、僧侶の側からは頼瑠を始めとする真言僧侶に焦点を当て、その著作の中に如何に文学が取り込まれているかを検証し、両者の間にいる人物として無住をとりあげるという方法をとっている。それによって、密教と文学との有機的な関係の全貌が明らかになるであろうという、しっかりとした目標を立てていると評価できる。

(3) 研究史への対応の適切性 (当該分野の先行研究を渉猟し、それに関する的確な理解に立脚して、研究を当該分野の研究動向の中に位置づけている。)

研究史への対応については、各章各節における個々の論中に〔注〕を施し、先行研究の紹介をしているのは、当たり前ではあるが高橋氏の真摯な態度を感じるものである。例えば、「仏教文学」の定義に係わる先行研究として、藤村作氏編『日本文学大辞典』、永井義憲氏『日本仏教文学研究』(古典文庫、1957年)、関口忠男氏『中世文学序考』(武蔵野書院、1992年)その他を適宜引用し、「仏教文学」の定義を十全に理解し、さらに本論文を進める基本の方法として組み込んでいる。また、第二章第二節の五では、頼瑠著の『真俗雑記問答鈔』にみえる夢想記事に関する先行研究について一項目を立てて論じているのもその一つの例であろう。

(4) 論旨の明確性・一貫性 (分析・考察をへて結論に至るまでの論旨が明確で一貫している。研究目的に対応した結論が導かれている。)

本論文は、六章から成っているが、緒言で述べている研究方法にそって、第一章では西行をとりあげ、第二章では頼瑠著になる『真俗雑記問答鈔』をとりあげ、第三章では覚鏝撰述の『孝養集』と頼豪撰述の『束草集』をとりあげ、第四章と第五章では「真言文化圏」における僧侶の活動の具体例として、『連々令稽古双紙以下之事』・『醍醐寺真俗雑談記』・『宥快法印御物語之事』・『成田紀行』・『高野参詣路次中日記』その他をとりあげ、第六章では無住の著作『沙石集』と『聖財集』をとりあげ、それぞれに論究が進められている。六章を通覧してみると、仏教に軸足を置く側と、文学に軸足を置く側、その両者の間に位置する側の、それぞれの活動とその著作を詳密に研究することで、中世密教文学の研究が十全なものとして成り立ち、その特徴を確かなものとして捉え得ることができるという高橋氏の意図と主張は、一貫して明確に筋が通っており、斬新でかつ説得力があるものとなっていると評価できる。

(5) 構成・表現の適切性 (学術論文として体系的に構成されており、適切な表現・表記法によって記述されている。)

高橋氏の文章は、難解な仏教書の内容を平易な文体で解説するよう心がけられていて、明解で分かりやすい。特に、資料の翻刻解説に際しては、その資料の持つ歴史的意義や価値が丁寧にか

つ適切な表現でもって記述されており、評価できる。

(6) 学術的・社会的な貢献 (学術水準や学際的観点から見て、十分な独創性や重要性があり、社会的要請にも応える可能性を有する。)

高橋氏がとりあげている研究対象は、西行・無住を除くと、文学研究分野では先行研究も少なく耳慣れない著作も多いが、そうしたものに目を向け研究を進展させた点に独創性をみることができる。例えば、第五章第一節での『醍醐寺真俗雑談記』の論は、先に述べたように、第16回日本密教学会賞の受賞対象となったもので、学会で注目を浴び、高く評価されている。また、『真俗雑記問答鈔』と『連々令稽古双紙以下之事』によって、僧侶が教養として仏教書以外の和歌集や物語や経書類などの外典をも多く修めていたという実体を知り得たことは、文学研究者が寺院蔵書の悉皆調査を進めている昨今の現状を意味あることと位置づける証にもなっている。今後の社会的要請にも十分応え得る論文となっていると評価できる。

3. 結論

本審査委員会は、高橋秀城氏の博士学位請求論文「中世密教文学の研究」に対する、以上の評価を総合的に考え、高橋秀城氏が、論文博士として十分な研究能力を持ち、かつ、完成度の高い研究成果を挙げたものと認め、高橋秀城氏に博士（日本文学）の学位を授与することが妥当であると全員一致で判断し、ここに報告する次第である。